



世界に寄与した鉱害防除技術

# 「足尾銅山」 世界遺産へ第一歩

平成19年9月27日の新聞にこんな活字が踊った「日光市文化庁へ提案書提出、足尾銅山世界遺産へ第一歩」。

足尾といえば、わが国で初めての社会問題といえる足尾銅山の鉱害問題と田中正造の追及が知られている。

足尾銅山は1610年（慶長15年）の発見から1973年（昭和48年）まで400年近くつづいた銅山である。明治初頭に富鉱脈の発見や生産技術の近代化によって生産量が急速に伸び、19世紀末には東洋一の生産量を誇る銅山へと成長した。しかし、この急成長は他の銅山にも見られるように製錬工程で発生する亜硫酸ガスと鉱山廃水による環境悪化をもたらすことになった。事態を重く見た明治政府はわが国初の「予防工事命令」を発令し、以後徹底した対策を命じた。鉱山側もこれに応え万全の廃水対策を講じ、亜硫酸ガス対策には最新の技術を駆使、試行錯誤を繰り返した結果、独自の「自溶製錬法」を確立し、ガスの完全回収に成功したのである。この製錬法は鉱害対策技術として世界に伝播し、現在でも主流の製法として活躍している。

このほど日光市が提案書で掲げた「足尾銅山」のコンセプトは、

民営鉱山として日本の近代化を牽引したこと、社会問題化した鉱害、そして世界各国に普及した鉱害防除技術の開発の3点だ。銅山は1973年に閉山し、銅生産の歴史も閉じたが、坑内廃水の浄化処理は現在も予防工事命令により建設された施設を改良しながら続けられている。また、工事命令後始められた煙害地の植林も自溶炉導入後に本格化し、国、県、企業のみならず、今日では多くのボランティア（NPO法人 足尾に緑を育てる会 会長神山英昭氏など）が参加し、徐々に緑は蘇りつつある。今回の世界遺産への第一歩について、日光市足尾総合支

所 坂下一樹課長と同市教育委員会生涯学習課 鈴木泰浩係長は口を揃えて言われる。

— 足尾には20世紀のよいことも悪いことも凝縮されています。人間は自然を壊すことがあるかもしれませんが、自分の手でそれを蘇生させる努力も惜しみません。足尾の山には往時の製錬を工程を追って見ることができる施設・設備が残っています。提案書には、坑道や精錬所、発電所、浄水場、鉄道など25件の今後守るべき資産の候補を挙げましたが、これらは、今何か手を打たないといずれなくなってしまいます。貴重な文化的な遺産の価値が法で守られるよう、これからも世界遺産の指定に向け努力していきたいと思います —



坂下一樹課長



鈴木泰浩係長



旧製錬所



通洞坑口



渡良瀬川のせせらぎをわたる「わたらせ渓谷鉄道」



鉱夫の浴場跡



足尾の山に行われる植樹作業（NPO法人 足尾に緑を育てる会）